ISSN 1884-7730

安曇野ちひろ美術館
美術館だより

No.89
2017.2.20

40th ANNIVERSARY 20th
TOKYO・AZUMINO

開館20周年記念Ⅰ
〈企画展〉高畑勲がつくるいわさきちひろ展

ようこそ！ちひろの絵のなかへ

●2017年3月1日(水)～5月9日(火)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社

古今東西の美術や文学に通じ、独自の審美眼でアニメーション表現の可能性を追求し、第一線で活躍してきた高畑勲（たかはたいさお）。彼に深い洞察を与え続けてきた画家のひとりが、いわさきちひろです。本展では、高畑の視点からちひろの絵の魅力を新発見し、今までにない演出でちひろの絵の世界を‘体感’していただきます。

高畑が初めて、ちひろの絵本に出会ったのは今から約50年前のことです。当時、高畑の長女が保育園から家に持ち帰った絵本が『あめのひのおるすばん』でした。詩のような短いことばと水彩のにじみを生かした絵で子どもの心をとらえたちひろの絵本に心を奪われたといいます。ちひろが新たな絵本表現に意欲的に取り組み始めたとき、高畑はリアルタイムでその作品に接し、折に触れてインスピレーションを得てきました。

図1　窓ガラスに絵をかく少女
『あめのひのおるすばん』（至光社）より
1968年

「おにた」に会える！

「ちひろが描く子どもの肖像でアニメーション映画がつくれたら、どんなにすごいだろう」と語る高畑。『おにたのぼうし』に出てくる鬼の子「おにた」（図2）は、ちひろが描いた子どものなかでも特異な存在です。高畑が培ってきたエンターテイメントの手法を使って、「おにた」の魅力に迫ります。「おにた」が絵本の世界から抜け出し、わたしたちに会いに来てくれます。

ちひろの絵のなかへ

「ただ上手いだけじゃなく、非常に夢のある色あいで“大衆性”も合わせもち、絶妙なバランスで人の心を惹きつけている。」ちひろの絵の魅力についてこう語る高畑は、自ら選んだ絵を、壁一面の大きさに高精細に拡大し、絵に包み込まれる空間をつくります。絵のなかへ入り込むような感覚で、子どもそのものをとらえた形、筆の勢いや絵の具のにじみの重なりなどをご覧ください。

図2　戸口に立つおにた
『おにたのぼうし』（ポプラ社）より　1968年

図3　海とふたりの子ども
『ぽちのきたうみ』（至光社）より　1973年

戦争を想像すること

高畑は9歳のときに岡山で空襲に遭い、九死に一生を得ました。戦争をテーマにしたちひろの絵本を開くと、そのときのことがまざまざとよみがえるといいます。アニメーション映画『火垂るの墓』（野坂昭如原作1988年公開）を監督するにあたり、高畑は、若い制作スタッフにちひろの絵本『戦火のなかの子どもたち』を見せて、想像力を高めてもらい、迫真の表現を追求しました。絵本の場面を拡大し、焦土を想像すれば、戦争の虚しさと平和の尊さが響いてきます。

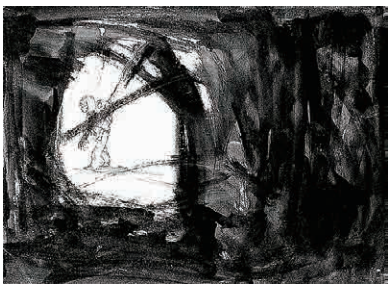


図4　焼け跡の姉弟
『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）より
1973年

子どもの肖像

高畑は、近作『かぐや姫の物語』（2013年公開）で、あえてラフなタッチで余白を残して、線の裏側に何が描かれているのか、観客の想像力を呼び覚まそうとしたといいます*。克明な描写で画面を埋め尽くし本当らしさを押し付けるのではなく、見る人の心のなかにイメージを喚起させる手法で、アニメーションにしかできない生き生きとした表現を実現しました。高畑が自身の映画づくりに引き寄せて深く共感しているのが、ちひろの「引き算の表現」です。「ちひろの描く子どもの顔は、あんなに少ない線と色で描かれているにもかかわらず、しばしば、どんな油絵による肖像画よりも雄弁に、深く、その子の内心を語ってくれます。」と称賛しています。高畑が厳選したちひろの子ども像も展示します。

（原島恵）

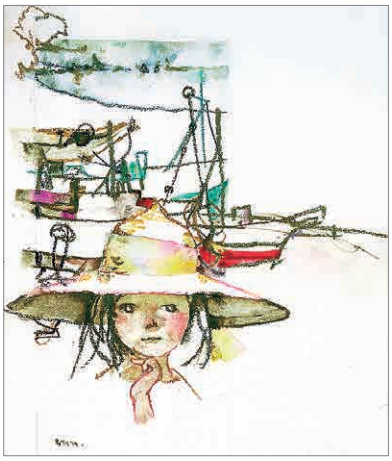


図5　少女と港の風景『貝の鈴』（大日本図書）表紙
1970年

高畑 勲（1935～）

東京大学仏文科卒業。東映動画（現・東映アニメーション）などを経て、1985年、宮崎駿らとスタジオジブリ設立。主な監督・演出作品にＴＶシリーズ「アルプスの少女ハイジ」「母をたずねて三千里」「赤毛のアン」、映画「じゃりン子チエ」「セロ弾きのゴーシュ」「火垂るの墓」「おもひでぽろぽろ」「平成狸合戦ぽんぽこ」「ホーホケキョ　となりの山田くん」「柳川掘割物語」「かぐや姫の物語」など。そのほか「王と鳥」など海外アニメーションの日本語版翻訳・監修や『十二世紀のアニメーション』『アニメーション、折りにふれて』など著作多数。当財団評議員。

＊「スタジオジブリ30年目の初鼎談」『文藝春秋』2014年２月号より

開館20周年記念Ⅰ

〈企画展〉奈良美智がつくる　茂田井武展　夢の旅人

●2017年3月1日(水)〜5月9日(火)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社

学校で習う美術のつまらなさは、それが自分の生活からかけ離れていたことだ。
僕は絵を描いたりしているが、実を言うといわゆる名画よりも生活する中で出会ったもの、
たとえば絵本から学ばせてもらったほうが多い。
そして僕の好きな日本の絵本作家たちは、どこかしら茂田井武にその源流をみる気がする。
果たして僕もそのひとりに違いない。
彼の美意識は生活の中に息づき、それゆえ逆説的に崇高だ。
彼の絵の中には西洋も東洋もなく、ただ純粋な魂だけがある。　　奈良美智

図1　画帳「続・白い十字架」より　1931–35年

図2　絵物語「夢の絵本」より　1948年

戦後の混乱期の子どもの本におびただしい数の絵を描きながら、日本の絵本の隆盛期を待たずに早逝した茂田井武(もたいたけし)。その画業は大切に受け継がれ、後に続く多くの画家たちにも影響を与えてきました。茂田井が亡くなった3年後に生まれ、今まさに現代美術のアーティストとして世界的に活躍する奈良美智(ならよしとも)も、茂田井の絵に心ひかれるひとりです。

本展では、奈良美智が今も「新しい」と感じる茂田井武の作品を選び、展覧会を構成します。

遠い異国で謳歌する自由——その自由な魂から生まれる絵

1930年、21歳の春に、茂田井は鞄一つで欧州放浪の旅に出ます。滞在先のパリやジュネーブで、夜な夜な絵日記のように描きためた画帳「Paris の破片」「続・白い十字架」には、異国の人々と哀歓を共にした青春時代の日々が、生々しく映し出されています。異国の自由な空気のなかでの制作や思索は、ドイツに長く滞在した経験を持つ奈良にとっても、大切な時間でした。

図3　画帳「Paris の破片」より　1930年頃—35年頃

おじいさんの子どものころの写真をひきだしから見つけたような——

茂田井は子どものころの記憶や、欧州の旅での印象、夢のなかの光景などを、まるで印画紙に焼き付けるように絵にしました。時を経るごとに想い出の映像が「その時そのまゝの不死の姿」*に近いものとなってゆき、朦朧とした輪郭から鮮明度を加えていく——「現像液の中で印画紙を揺すぶっているようなもの」*だと、茂田井は自分の絵について語っています。奈良はそうした絵から、おじいさんの子どものころの写真をひきだしから見つけたようなノスタルジーを感じるといいます。

図4　絵物語「宝船」(六)　1939年

父と子の濃い時間

狭い画室に貼られていたという童話やおもちゃの絵、「父と子のノート」と題した合作のノート、描き損じの裏に子どもが描いた絵まで、茂田井は大切に手元に残していました。子どもとの濃い時間のなかで生まれたそうした絵を、奈良は愛おしそうに選び出しています。

「人に見せるための絵よりも、自分との対話のなかで生まれる絵にひかれる」という奈良は、ほかにも夢から生まれた絵物語や戦時中の日記など、折々の茂田井の内面が色濃く表れた作品を選んでいます。奈良美智の視点から、新たな茂田井武の魅力が開かれます。　（上島史子）

図5　白くまとお人形　1947年

茂田井 武（1908〜1956）

東京日本橋生まれ。1923年、生家の旅館が関東大震災で全焼する。中学卒業後、太平洋画会研究所、川端画学校などで絵を学び、アテネ・フランセに通う。1930年シベリア鉄道で渡仏、パリの日本人会で働きながら独学で絵を描き、日々の生活を画帳に描きとめた。1933年に帰国。職を転々とした後、成人向け雑誌「新青年」などに挿し絵を描き、1941年から絵本を手がける。1946年日本童画会入会。戦後日本の復興期に絵本、絵雑誌などの仕事で活躍する。1954年小学館絵画賞受賞。48歳で亡くなるまで、病床で絵を描き続けた。

奈良 美智（1959〜）

青森県生まれ。1988年、愛知県立芸術大学大学院修了の翌年にドイツに渡り、国立デュッセルドルフ芸術アカデミー修了。その後も、99年までドイツに滞在して制作と活動を行う。2000年に帰国後、日本を拠点に世界中で展覧会を開催する。2001年と2012年に横浜美術館で大規模個展、また2010年には Asia Society Museum（ニューヨーク）2015年には Asia Society Hong Kong Center（香港）にて個展を開催した。絵画を中心にドローイングや彫刻など幅広い表現で、国や文化背景を超えた人々と共振し支持を得る。

＊「印象のレンズ—私の描きたい絵—」『教育美術』1952年5月号より

ちひろ美術館・東京の開館40周年、安曇野ちひろ美術館開館20周年を迎えて

（公財）いわさきちひろ記念事業団事務局長　竹迫祐子

今年、ちひろ美術館・東京は開館40年、安曇野ちひろ美術館は開館20年を迎えます。絵本を愛し、ちひろの絵と子どもの幸せと平和を願う心を大切に考えてくださるみなさまに支えられ、これまでに、東京館は274万人、安曇野館は389万人のお客さまにご来館いただきました。心より、感謝申し上げます。

1977年　いわさきちひろ絵本美術館開館〜世界で初めての絵本美術館の誕生

1974年８月８日、いわさきちひろは55歳という早すぎる死を迎えました。翌々日の朝、ちひろの夫の松本善明は、ひとり息子の松本猛とそのパートナーであった松本由理子に、「ちひろの残したものを私たち家族だけのものにせず、もし人々が望むのなら、ささやかであっても人類の遺産の一つとして位置づけたい」と語りました。

このことばをきっかけに、美術館建設に向けての動きが始まります。現館長の黒柳徹子や、児童文学者の松谷みよ子、絵本画家の田島征三といった人たちが全国に呼びかけ、多くの方々から期待の手紙とともに寄付を寄せていただきました。76年、遺族からちひろの全作品と、著作権と資産の一部を寄贈されて財団を設立、翌年９月に「絵本等を中心とした文化の民主的多面的な発展に寄与すること」を目的に、画家の自宅の一角にいわさきちひろ絵本美術館（現、ちひろ美術館・東京）が開館しました。以来、ちひろだけでなく、日本と世界の絵本画家の仕事を紹介する展覧会を開催してきました。

それが世界ではじめての絵本の専門美術館であることがわかるのは後のことですが、ちひろの記念館ではなく、広く絵本文化全体を視野に入れて活動してきたことが、今日の活動とコレクションの充実につながっていきました。

1977年開館時のいわさきちひろ絵本美術館

1997年　安曇野ちひろ美術館開館〜絵を見なくていい美術館の登場

1997年当時、ちひろ9,400点、ちひろ以外の国内外の絵本画家4,500点。それらの作品を常時公開できる美術館をと、同年４月、戦後ちひろの両親が暮らした長野県北安曇郡の松川村に、もうひとつ、バリアフリーの美術館を開館。ちひろと世界のコレクションを紹介する展示室、絵巻物から近代の絵本まで、その歴史を紹介する展示室を常設しました。

建て替え後のちひろ美術館・東京

１万坪の村営公園に囲まれ、遠く北アルプスの山を臨み、眼前に村の有志が丹精した大花壇が広がる、この豊かな景観に恵まれた安曇野館では、心を開放してゆったりと過ごしてほしいと、「絵を見なくていい美術館」というコンセプトを持ちました。公園を散策したり昼寝をしたり、おいしいお茶とケーキを味わい、気が向けば絵本を読み、優れた美術、芸術と出会うことができる美術館です。

その後、安曇野は２回の増築を行い、昨年は『窓ぎわのトットちゃん』の電車の教室を再現して松川村営安曇野ちひろ公園も１万５千坪に拡充。東京は2002年に完全バリアフリーを実現するため全館建て替えを行いました。また、2013年には、母体の財団も公益財団法人に認定され、今日に至っています。

安曇野ちひろ公園・トットちゃんの広場

子どもが幸せに育つ未来へ

安曇野館が開館以来、大切にしてきたのが地域との連携です。松川村民は全員がフリーパスですが、子どもから大人まで、地域の人々がさまざまな形で美術館活動に関わってくださっています。2002年からスタートした中学生ボランティアの活動には、毎年170〜180人の中学生が参加してくれます。また、村で生まれる子どもたちには美術館が０歳で、村が６歳で絵本をプレゼントし、絵本との出会いを創っています。こうした活動は、東京館での子育て支援の活動としても広がり、今、ちひろ美術館は「ファースト・ミュージアム（子どもがはじめて出会う美術館）」としての取り組みに力を入れています。2007年からは、両館ともに高校生以下の入館料無料とし、子どもたちの場を目指してきました。今日、日本では子どもの貧困が大きな問題です。経済格差は、次世代のさらに大きな格差を生み、子どもたちの健やかな成長を阻んでいます。誰もが豊かな教育を受け文化を享受できる世の中。それはいわさきちひろの「世界中のこども　みんなに平和としあわせを」という願いに重なります。

絵本の専門美術館として、原画の収集、保存、研究も大切な活動です。今年は、周年記念として待望の「いわさきちひろの作品総目録」を編纂。また、これまでの研究成果を活かして国会図書館・国際子ども図書館で、絵巻物から現代の絵本まで1300年を辿る「日本の絵本の歩み」展を両館コレクションで共同開催します。あわせて当館では、1900年代初頭から現在までの日本の絵本の100年を辿る展示も行います。

さらに、国内外の美術館や関連機関と協力しながらの研究も一層深めていきたいと考えていますが、同時に、アジアをはじめ世界の国々との交流を深め、ちひろの絵と心を紹介するとともに、日本の絵本文化を紹介し、ともに優れた絵本と文化創造のための活動も積極的に行っていきたいと思います。その一環として、今夏は一作年のインド、昨年のシンガポールにつづいて、台湾の国立台湾図書館で「日本の絵本の歩み展」を開催します。

中国・杭州でのちひろ展子どもたちための鑑賞会（2012年）

戦争のない平和な未来のために

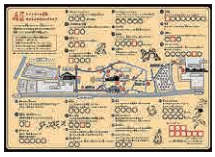
今年は、日本国憲法公布70年。すべての国民が「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を持ち、「戦争の放棄」「戦力の不保持」を誓った憲法を、70年前ちひろがどれほど誇らしい気持ちで受け止めたことでしょう。改憲論議が問われる今、ちひろ美術館は、戦争のない平和な未来のために、さまざまな活動を通じてさらなる発信をしていきたいと思います。

トットちゃん広場より

Ⅰオリエンテーリングマップ

後ろ姿のおさげ髪の少女
1970年

本年は、このコラムで４回にわたりトットちゃん広場の魅力をお伝えしていきます。初回は、子どもたちに大好評の「オリエンテーリングマップ」についてです。



広場には、トットちゃんがお財布を落としてしまう「汲み取り口」、クラスメイトと散歩中にのぞき込む「流れ星の井戸」などが再現されています。また、印象的なエピソードが書かれた「本の形の看板」が20か所以上に設置されています。このマップを手に、再現スポットと看板をめぐり、クイズを解いていくと「あいことば」が完成し、楽しみながらトットちゃんの世界を体験できるというしくみです。

トットちゃんが、学校からの帰り道に砂の山へ飛び込んでしまう「とびこんじゃダメ！」では「トットちゃんは砂の山に向かってどんな速さで駆けて行ったかな？」という問題が用意されています。さて、答えは……ぜひトットちゃん広場で確かめてくださいね。

昨年は、早速、校外学習の一環としてこのマップに取り組んでくださった小学校もありました。トットちゃんについて知らなかったという生徒も興味を持ち、高学年が低学年をリードし、声を掛け合いながら広場内を駆け回っていました。子どもたちがお互いを尊重し、協力しながら学ぶことを大切にしていたトモエ学園の「みんないっしょだよ」の精神が、子どもたちに伝わっていることが実感できます。　（畔柳彩世）

ひとことふたことみこと

8月31日（水）
長野県木曽町開田高原から来ました。私の祖母がちひろさんが好きで、母も同じく好きに。そして私へとちひろさんの絵は受け継がれてきました。ちひろさんのあたたかく、やさしい雰囲気の絵に囲まれて、たいへん幸せな時間を過ごすことができました。またぜひ来たいです。わたしは、「ぶどうを持つ少女」が大好きです。
（18歳）

9月1日（木）
川崎から家族できました。小林先生のような、ひとりひとりを大切にする先生が日本中にたくさんいたら、子どもたちはいきいきするなと思いました。ひとりひとり尊く、価値があります。
（ヨハネア　16歳）

9月24日（土）
はじめてトットちゃんのうんどう会に参加しました。いろいろな考えがあって、とてもおもしろかったです。またあったらぜひ参加したいです。

11月1日（火）
窓ぎわのトットちゃんを育てている私です。息子が学校になじめず、私が学生時代に読み、頭から離れない『窓ぎわのトットちゃん』を思っています。今日、息子とここへ来られたことに感謝します。

11月2日（水）
東京、安曇野の両方を何度か訪ねています。心が落ち着く場所です。子どもたちの幼いころ、赤ちゃんのころを思い出したい時は、必ずちひろさんの本を開きます。そうすると、30歳、26歳の息子たちは１日だけ赤ちゃんに戻ってくれます。私の記憶を連れて来てくれるのです。
【『長新太の脳内地図展』感想ノートより】

11月3日（木）
長さんは、うちにもたくさん本がありますが、ひとつひとつがとても楽しいです。かわいい絵で、まるで頭に宇宙が広がっているみたいでとてもいいと思います。またいろいろ見たいと思います。
（kouba　小６）

11月29日（火）
絵本作家さんは感性の赴くままに作品をつくっているのだろうと思っていたのですが、ちひろさんや長新太さんの展示を見て、思想というか自分の意見を創作に昇華しているのだと感じました。来てよかったです。

美術館日記

9月24日（土）
トットちゃん広場での運動会に３歳から中学２年生までの子どもたちが集まった。トットちゃんのお話にも登場する「鯉のぼり競争」には小さな子たちが参加。大きな布の鯉のぼりの口から入って尻尾から出る。なかには、鯉のぼりのなかが怖くて泣いてしまう子や、くぐらずに上を歩いていく子もいて、その微笑ましい姿に歓声がわく。大きな子たちは「借り物競争」に挑戦。「白いＴシャツを着ている人」や「帽子をかぶっている人」といったお題の人探しに、子どもも大人も大声でヒントを出し合い、見つかったらその人と手をつないでゴール。賞品には公園の農園で採れた新鮮な野菜が手渡された。どんな子どもも楽しめるようにと考えられていたトモエ学園の運動会のように、みんなの笑顔が輝く一日になった。

11月13日（日）
開催中の「長新太の脳内地図」展にあわせ、子育て中のパパたちによるパパ’ｓ絵本プロジェクトの絵本ライブを開催。『ゴムあたまポンたろう』の“絵本うた”では、先に歌を聞いて、その歌から想像した絵を子どもたちに書いてもらったり、等身大のキャベツくんといっしょに歌ったり踊ったり。あかちゃん連れのお母さんは抱っこしながらリズムにあわせて体を揺らし、自然と親子のふれあいが生まれていた。参加者からは「こんな絵本の読み聞かせは初めて！」「子どもに読んであげたい絵本が増えました」といった声が聞かれた。

12月16日（金）のち
一面うっすら雪化粧のなか、松川村役場の職員やちひろ公園サポート隊といっしょに、トットちゃん広場の大掃除。電車２両は棚や扉、窓や照明も外して磨き上げる。開園からの約半年間を振り返りつつ作業に臨むこと数時間、電車は隅々までぴかぴかに。また来年、このトットちゃん広場でたくさんの子どもたちの笑顔に出会えることを楽しみに、このあと電車は保護シートをかけられ、安曇野の長く厳しい冬に備える。

INFORMATION

●次回展示予定　2017年5月13日(土)～7月4日(火)

〈展示室1〉〈開館20周年記念Ⅱ〉
走る！跳ねる！　ちひろ・子ども百態

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社

いわさきちひろ
ローラースケートをする少年
「しょうがくしゃかい1たろうとはなこ」より　1971年

「子どもの肢体の魅力はかぎりない」と語ったちひろ。子育てのなかで、わが子や子どもたちの姿を日常的にスケッチに留め、どのような恰好もモデルなしで描くことができたといいます。本展では、躍動感あふれる子どもの動きを、ちひろがどのようにとらえ、表現したかを探ります。

〈展示室3・4〉〈開館20周年記念Ⅱ〉
ちひろ美術館コレクション　子どもの世界・世界の子ども

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社

本展では、コレクションのなかから、「子どもの心」「社会のなかの子ども」「子どもの夢」などをテーマに、子どもを描いた作品の数々を紹介します。歴史や文化、自然、社会情勢などの異なる地域で、絵本画家たちがどのように子どもをとらえ、表現したかを探ります。

クラウディア・レニャッツィ（アルゼンチン）
『わたしの家』より　2001年

〈展示室2〉ちひろの人生／ピエゾグラフによる『窓ぎわのトットちゃん』展　　〈展示室5〉絵本の歴史

安曇野ちひろ美術館　イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。 http://www.chihiro.jp/　TEL. 0261-62-0772　FAX 0261-62-0774
https://www.facebook.com/chihiro.azumino

●展示関連イベント　講演会「高畑勲が語る　ちひろの魅力」

アニメーションづくりの第一線で活躍してきた高畑勲。ちひろの作品から創作のインスピレーションを得ていたという高畑が、その審美眼を通して、新たなちひろの絵の魅力を語ります。

○日時：4月16日（日）14：00～15：30
○会場：安曇野ちひろ美術館　多目的ギャラリー
○料金：500円（入館料別）　定員：80名（先着順）
○申し込み：要事前予約
（ちひろ美術館 HP、TEL0261-62-0772、美術館受付にて）

●入館無料デー

日ごろの感謝を込めて、美術館の近くにお住まいのみなさまへ向けて、入館無料でお楽しみいただけるご優待日を設けました。お誘いあわせのうえ、ご来館ください。
※当日、ご住所のわかるものをご提示ください。

3月5日（日）松川村民特別優待デー
3月26日（日）長野県民入館無料デー
4月23日（日）池田町・生坂村民入館無料デー
5月21日（日）松本市民入館無料デー
6月4日（日）大町市民入館無料デー
6月18日（日）安曇野市民入館無料デー
9月24日（日）白馬村・小谷村民入館無料デー

●安曇野ちひろ美術館20周年！　おめでとう20歳！

開館20周年を迎える2017年、美術館と同じ20歳のみなさまは、特別に入館無料です。
※生年月日のわかるものを受付でご提示ください。

●開館記念日

この日ご来館の先着100名に、非売品ポストカードをプレゼントします。
○日時：4月19日（水）

●3月平日限定 カフェドリンク券付き入館券 1000円

3月平日限定で、絵本カフェのドリンク付き入館券を販売いたします。春の訪れが待ち遠しいこの季節、心も体も温まる1杯で、美術館でゆったりとした時間をお楽しみください。（通常入館料　大人800円）

●ちひろ美術館・東京開館40周年　安曇野ちひろ美術館開館20周年ロゴマーク

グラフィックデザイナー・佐藤卓によるデザインのロゴができました。カラーは、ブルーとオレンジの2種類があります。

40th ANNIVERSARY 20th
TOKYO・AZUMINO

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日11:00～
展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせや素話などをおこないます。
（参加自由、入館料のみ）

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日14:00～ちひろ展、14：30～茂田井武展
展示室で作品を見ながら、担当学芸員が展覧会の見どころなどをお話します。
（参加自由、入館料のみ）

●3月～5月の開館情報

GWは無休。4／29(土)～5／7(日)は18時まで開館延長。
休館日：3／22(水)、4／12(水)、4／26(水)、5／10(水)～5／12(金)

CONTENTS
〈展示紹介〉高畑勲がつくるちひろ展 ようこそ！ちひろの絵のなかへ…2
／奈良美智がつくる 茂田井武展　夢の旅人…3
〈活動報告〉ちひろ美術館・東京の開館40周年、安曇野ちひろ美術館開館20周年を迎えて…4
トットちゃん広場より／ひとことふたことみこと／美術館日記…5

美術館だより　No.89　発行2017年2月20日

安曇野ちひろ美術館
〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　テレホンガイド0261-62-0777　TEL.0261-62-0772　Fax 0261-62-0774
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiroa@seagreen.ocn.ne.jp